



～京都アスニー ゴールデン・エイジ・アカデミー～

「御願寺の創建-皇族貴族の仏教信仰」

京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京まなびミーティング」。
23回目となる今回は、本郷 真紹委員が、京都アスニーの人気講座「ゴールデン・エイジ・アカデミー」とタイアップして、「御願寺の創建-皇族貴族の仏教信仰」というテーマで講演をされました。
多くの方が熱心に聴き入っておられました。

日時：平成31年4月19日（金） 午前10時～11時30分
場所：京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）
講師：本郷 真紹 委員

講演は、京まなびネット
「動画で学ぶ」コーナー
で視聴できるよ。



（京都市社会教育委員、学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）

京都アスニー「ゴールデン・エイジ・アカデミー」

毎回、京都が誇る歴史、文化、文学、伝統芸能などをはじめ、健康、防災、環境、人権など様々な分野の専門家を講師にお招きして実施している、無料の教養講座です。講演会の後には、懐かしい童謡・唱歌・抒情歌などを合唱していただく歌唱指導の時間も設けています。

○「御願寺」とは

おはようございます。

本日は、平安時代になってできた「御願寺」というお寺についてのお話をさせていただきます。

御願寺には、例えば仁和寺、醍醐寺などがあります。天皇あるいは皇族の方々が、特定の目的で祈願をする場として建立されたお寺です。亡くなった方の追善、病の平癒、生存を願う、男子出産祈願、安産祈願などのお祈りの場として設けられました。



（薬師寺ホームページから）

厳密に言えばもっと前の時代から、奈良の薬師寺は、天武天皇の奥さんである鸕野皇后、すなわち後の持統天皇の病氣平癒を祈願してお造りになりました。あの有名な東大寺大仏殿の東の山手にある金鍾山房も御願寺の前身です。大仏造立を発願された聖武天皇と、その奥さんである光明皇后との間に基王という皇子がお生まれになりました。古代において、皇太子の位置づけがなされるのは、15歳ぐらいの一人前になってからが一般的でした。当時の皇位継承に不安があり、

皇子は生後2～3ヵ月で皇太子の地位につけられましたが、生後1年で亡くなってしまいます。悲しみに暮れられた母、光明皇后が、基王の菩提を弔うために金鍾山房というお堂を奈良の三笠山の中腹に造りました。平安時代になるとたくさんの御願寺が作られるようになってきます。

日本の古代において、お寺がどういう意味を持ったのかということを確認していただいた上で、時代の推移にしたがってお話させていただきます。

古代の、特に朝廷や天皇による宗教政策を分析する時に、具体的な指標としては4つあります。天皇は仏教を保護した一方で統制しました。それを「仏教興隆政策」あるいは「仏教統制政策」といいます。保護と統制は、具体的な指標をあげてはかると、評価する人間の感覚、スタンスによって異なります。

それよりも具体的に何をやろうとしたのか読み取ることが必要だと考えます。1つ目は「お寺をどうしたのか」、2つ目には「お坊さん、尼さんをどうしたのか」、3つ目には仏教は哲学思想ですから、「経典、仏法というものを説いた経律論という書籍、思想をどうしたのか」、最後に「お寺とお坊さんとお経が揃って初めて催される仏事をどうしたか。」です。

4つ指標を立てれば、日本書紀や続日本紀といった古代史料に出てくる様々な事象も、これらのいずれかに分類されることとなります。今日はそのうちのお寺について考えたいと思います。

○お寺のはじまり ～古墳から寺院へ～

お寺が本格的に建てられたのは、蘇我馬子が発願し、当時の推古天皇のために造ったとされる飛鳥寺です。6世紀の末から7世紀頃、仏教の社会的普及に伴って建てられるようになったお寺は、個人の祈願や亡くなった方の追善という目的で建てられました。

お寺はどうして建てられたのでしょうか。病を治してもらい、死者を追善する一方で、見た者を圧倒する効果があります。日本に仏教が伝わって社会に根を下ろすまで、時の権力者、特に大王、後の天皇は、仁徳天皇陵等の数百メートルクラスの大規模な古墳を造りますが、西暦500年代になって次第に大規模古墳を造るのが廃れ、小規模化してきます。これは大陸で大規模な古墳を造るのが流行らなくなったからです。代わりに盛んに造られるようになったのが寺院です。この推移は、従来、古墳が持っていた機能や役割を寺院が果たすようになったと受け止めるべきです。

古墳は一般に、埋葬される権力者、時の天皇が大王と呼ばれていた当時は、天皇が自分の墓を生前に造る寿墓として造られ、権力のシンボルでした。ただ単に自分の名誉を伝える目的ではなく、支配を示す重要な意味があり、中央で天皇や朝廷が寺院を造りだすと、地方の豪族も真似して同じ伽藍を持った寺院を造り出しました。



一般の解説では、古代の寺院は発掘された土器や様々な物から建立時期がほぼ特定されるといわれます。寺院は、仏教がはじめに大和から同心円を拡大するがごとく広まっていったと書かれております。仏教が広まったのか、寺院が広まったのか。寺院が広まったということは、仏教が広まったことになるのか。本当にそうなのか、私は疑問です。

寺院を造ることは、仏教の信仰が広まったことを意味するとなぜ言えるのでしょうか。

お寺は、ただ単純にファッションではなく、自分の権力を配下の者にひけらかす意味があり、都に建てられたお寺の何分の一かの規模で、規則的な伽藍配置で造られました。地方のお寺は、発掘すると金堂等の構

造位置から類型化されます。類型化する寺を造る必要は、朝廷との関係を背景に支配することを意味し、仏様の教えにはこだわらなかったのです。お寺が広まっていったことを根拠として仏教思想が社会に浸透していったと判断することはやや躊躇されます。

これは平安京にも密接に関係します。794年、桓武天皇が平安京に遷都した際、寺を造るのも規制され、平城京にある寺は、一切、平安京に持って来ませんでした。710年に平城京が造られた時は、それまで藤原京にあった大安寺などを移転させました。このように元にあった飛鳥の藤原の寺を平城京にもって行き、東大寺や西大寺等が造られます。ところが、平安京には一切お寺を持って来なかったのです。

○仏教政治とは

教科書に、桓武天皇はそれ以前の奈良時代後半の腐敗した仏教政治、道鏡が政治を支配していたことを改革し、政治と仏教は一線を画したからお寺は平安京に移転されなかった、と書いてありますが、これは本当なのでしょうか。

仏教政治とは何でしょうか。道鏡というお坊さんが国政に関与したことは何が問題でしょうか。出家者は本来、政治に関わりません。世間から出て俗世間のことに関わってはいけません。お坊さんの役目は、仏法を学び、修行を積むことだけで、政治活動をしてはならず、道鏡が太政大臣等になって国政に関与していたのはおかしいと言われます。

では、なぜ道鏡がその地位にのぼりつめたのか。仮に、国政に口を出す権限を持ったとしたら、それはどういう経緯だったのでしょか。

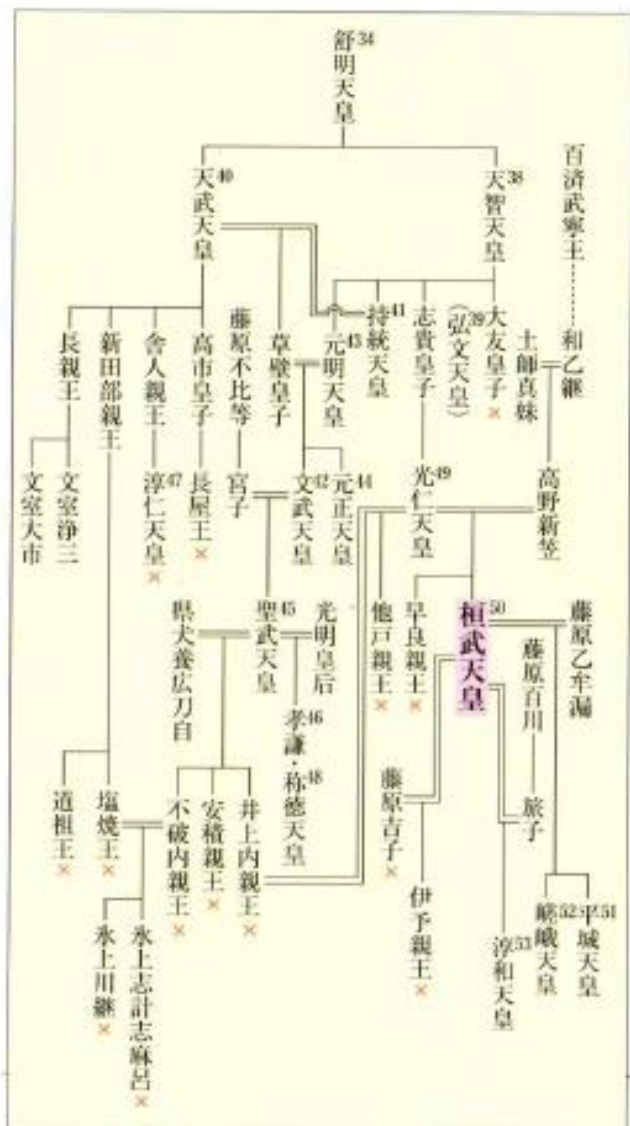
それは、彼に全幅の信用をおいていた称徳天皇という古代最後の女帝が原因です。称徳天皇は、即位した時から崩御する時まで、出家者で尼天皇でした。白河法皇など他の天皇は、一旦、皇位を生前譲位で自分の子供や孫に継がせてから出家しています。

749年、孝謙天皇は父親の聖武天皇から位を譲られ即位します。これは異例で、それまで聖武天皇以外に生前譲位した男性の天皇はいません。女性の天皇は、本来、後を継ぐ天皇がまだ幼いなど、中継ぎ的な天皇になっていましたが、男性の天皇は、原則、終身制です。聖武天皇は、御年49歳で娘の孝謙天皇に生前譲位され、その後出家して薬師寺に入られます。熱心な仏教信仰者でしたから、仏門に入ることは聖武天皇の理想で、そのために皇位を譲らないといけな、それでタブーを犯して娘に生前譲位をして出家します。孝謙天皇も淳仁天皇という親戚筋の男性に天皇の位を

譲り、出家して尼になります。その時に彼女に仏教を伝え、当時、病身であった彼女を救ったのが道鏡です。

その後、称徳天皇は764年2回目の即位をした際、道鏡には自分を支えてもらうために破格の待遇を与えて大臣禪師、太政大臣禪師、法王とし、また皇位継承争いを避けるために自分の位をなんとか道鏡に譲りたいとまで考えました。

道鏡に皇位に就こうという野心があったかは不明ですが、イメージが悪く捉えられた気の毒なお坊さんです。少なくともその基盤には称徳天皇の意向がありました。称徳天皇は出家者で、もうこれ以上、争いは繰り広げたくないが、皇位は守っていかないといけない、その1つの方法として血縁、血統による相続を変えて、道鏡を即位させようとしたのですが、それは周囲の理解を得られず失敗に終わります。



桓武天皇関係系図

×印は失脚等によって姿を消した人物を示す。桓武の時代環境の厳しさがよくわかる。数字は皇統譜の代数。

※ 井上満郎／著『人をあらく 桓武天皇と平安京』著者 井上満郎

(吉川弘文館, 2013年) から抜粋

○寺院観の変質

天武天皇の皇統は、称徳天皇が最後です。称徳天皇は結婚せず子供もいない、身内の者は失脚していく中で亡くなりました。それで天智天皇の孫、桓武天皇の父、光仁天皇が即位されます。桓武天皇の母親は、高野新笠で京都・大原野に本拠を持つ渡来系氏族の娘でした。当時は、母親の血筋が良いほうが跡継ぎに有力で、できれば皇族の女性が望ましかったのです。でなければ、中央でしかるべき地位についている有力貴族の娘が望ましく、地方豪族や渡来系氏族の娘の産んだ子は、本来、皇位継承の対象から外されます。桓武天皇は、大学頭や中務卿を経験したインテリ官僚で、天皇としての技量は持ち合わせていましたが、周囲の人間はどこか彼のことを冷やかに見ていました。桓武天皇は「私は革命を起こし、王朝を交代させる。天武天皇の皇統は称徳天皇で終わった。私は天智天皇のひ孫、しかも歴史を紐解くと、本来は天智天皇の子孫で跡を継ぐべきだったところを、壬申の乱というクーデターによって皇位が篡奪された。我こそが、正当な皇位継承者である。」とっています。

こうして、桓武天皇が、長岡京、平安京を造ります。なぜ山城に都を持ってきたのかといえば、1つは母親の本拠があったということ、そして、曾おじいさんである天智天皇との関係を意識しました。

桓武天皇は、東寺、西寺という2つのお寺を造り、それ以外の寺の建立は認めませんでした。東寺、西寺は、最初、住んでいるお坊さんはおらず、空き寺でした。これは法会を催す儀式の場でした。東寺にお坊さんが住みだしたのは、空海が東寺を真言の道場にして50人の真言宗のお坊さんを住まわしてからです。

また、院政期に白河天皇が建立し、現在の岡崎にあった法勝寺の九重の塔は、白河天皇の象徴的な建物だったのですが、法勝寺にもお坊さんはおらず、目的としては、建てた人の権力のシンボル、儀式を修する場でした。

お寺は、住職が全面的に管理していると受け止めがちですが、そればかりではありません。違った類型のお寺もあったとお考え下さい。桓武天皇が東寺、西寺だけを羅城門の東と西にあたかも仁王門のごとく置いたのは、邪気が入ってくるのを防ぐ目的もありました。また、正式な入口は南ですから、羅城門から入って来た人に、立派な物が建っていると思わせたのです。今で言うと2つのスカイツリーが建っているようなもので、視覚的な効果を狙ったと思われます。

光仁天皇は桓武天皇の父親ですが、この人が天智天皇の孫、白壁王です。この時に、称徳天皇時代への反

動から称徳天皇の発願にあたる西大寺の造営計画も変更しましたが、仏教嫌いではありません。例えば、世の中に社会的不安が増大した時には、律令官人に対して、「道を歩くときは必ず般若心経を唱えながら歩きなさい」と言ったと命じていますから、光仁天皇はそれほど仏教嫌いではないのです。同じようにその子ども、桓武天皇もそうです。



○「定額寺」

京や畿内の定額寺は定義が難しいです。定額が何を意味するのか、「額」というのは「寺額」、お寺の額とって「国から名称が公認されたお寺」と読み取る時もあるれば、「この額というのは数のこと」で何ヶ所という形で制限されたという説もあります。まだ定まってはいいませんが、これは「朝廷によって公認されたお寺」として理解するのいいと思います。

現在の天津にある崇福寺は、かつて近江大津宮を営まれた天智天皇が造られたと言われています。珍しいことに、この寺は平地に建てられた大規模な伽藍寺院ではなく、山の登り口を少し上がった所を切り開いて弥勒堂等を造られた、半分、山林寺院的なお寺で、桓武天皇が崇福寺に隣接する形で新しく梵釈寺を建てます。

これは重要な点で、天智天皇ゆかりの地に、ひ孫である自分が、曾おじいさんの発願したお寺に寄り添う形で自分の発願するお寺を建てられている。もし、桓武天皇が仏教嫌いだったらこのようなことできません。

私の考えですが、近江に崇福寺や梵釈寺という国家の決まりで整備されたお寺が出てきて、一大仏教信仰圏、文化圏のようなものが形成され、最澄が出てきました。もちろん最澄はこれ以前の段階から出家していますが、最澄にとっては好都合のように、桓武天皇の代になって滋賀の大津の地、近江の地が1つの仏教文化圏になり、雰囲気盛り上げられます。

基本路線は、寺院の実践的規模を重視したと言いましたが、あえて感覚的規模を重視したのは東寺と西寺、この2つだけです。お坊さんは基本的に仏教の理論を

学ぶと同時に、自ら修行を積み、山の神様の力も借りて悟りを開く、または不思議な力を身につけることを目的に生活を送りますから、その本来の機能を実践するようにということです。

○公私混同

奈良時代に混乱した状況がなぜ起きたかという、必要以上に公と私とが密接な関係だったことが混乱の元になります。「公」の部分に特化するのが「国家仏教」、皇族にとっては「私」になるのが「宮廷仏教」で、国家仏教と宮廷仏教が混在してしまった状況が、桓武天皇にとっては本来の姿ではない、という評価になったのです。

今でも流行語になる「忖度」という言葉は大きな意味を持っています。公の立場にあり、客観的、公正に見ないといけないものに、「私」を導入させることが「忖度」だと思います。

中国では、王朝が弱体化し、違う王朝に取って代わられる、そのきっかけは公私混同です。具体的に、国王の側近的な立場にあった身近な人間、例えば「宦官」が国の政治にまで口出しする強い力を持ち出した時に、体制が乱れて王朝が崩壊します。このようなことを中国は繰り返していました。

仏教の好き嫌いの問題ではなく、政治レベルのものは政治レベル、私のことは私のレベル、このように区別しながら、一線を画した形で両者がお互いにそれなりの役割を果たす体制に持っていく必要があると考えたのが、桓武天皇です。これは寺院の建立を原則として禁じた政策の根底にある理念だと私は理解しています。

一方で、東寺や西寺を建て、梵釈寺を造り、寺院には特権を与えました。決して一方的に嫌っているわけではないということです。この桓武天皇が志した方向性は、受け継がれていくことになります。

結論的に、聖武天皇の肝いりで造られたお寺に対する政策が転換され、護国法会が定額寺でも営まれるようになり、国分寺の感覚的機能が放棄され、また権力のシンボルである伽藍の規則性がだんだんなくなってきました。これが桓武天皇の新しい仏教に対する姿勢を象徴しています。

○神社とお寺の違い

なぜ、古代の天皇は、近親結婚を繰り返していたのでしょうか。

一番理想的な結婚が異母兄弟の結婚と考えられており、兄と妹が結婚して生まれた子どもが象徴的な存

在でした。その中でも聖徳太子は、父と母が兄妹で、祖父は同一人物で両方の祖母が姉妹で、ある意味、最も理想的な天皇となるに相応しい生まれです。このように血が濃ければ濃くなるほど、天照大神以来の神の血が受け継がれるからです。その神の血を多く持っていることが最高の祭祀権者の条件でした。ですが、神々が人間の生活に太刀打ちできないことがあります。

それ2つあり、病と死です。今は神式の葬式はありますが、本来は、神式の葬式はありません。本来、神社は絶対、葬式をあげません。今でこそ病になったら助けてくれる神がいますが、ある意味では千数百年の神仏習合の名残で、本来、病に勝てる神社はありません。病は「汚れ」で死も「汚れ」です。「汚れ」というのはあってはならない行為なので、神社はお寺と違い、今でも「禊」と「祓い」を厳格にやります。

神社は、病の人間は汚れているので絶対受け付けないのです。死んだ人間は、「汚れ」の一番最たるもので、病になった時、死んだ時に、伝統的な神式のやり方では対処できません。それに対し、仏教はそういうものこそ救済の対象にして、お坊さんの法力で病気を治し、死者を弔います。死者に対する思いは身近な人であればあるほど尋常ではありません。なんとかしたい、菩提を弔ってあげたい、追善してやりたいと思はずです。そこで登場するのが「御願寺」です。

○「御願寺」の登場

皇族や貴族が死者を弔う、病を治すために祈願してほしいと寺院を建立し、「御願寺」ができます。

しかし、それはプライベートなお寺で、このようなやり方をすると公私混同です。桓武天皇が目指した方向性、精神を生かしながら、お寺を建立するとなると、平安京の京域内に造ることははばかれます。仁和寺が造られ、醍醐寺が造られますが、これらの「御願寺」は平安京の外の淵に寄り添う形で建てられます。

仁和寺を造られたのは宇多天皇ですが、前身は父親の光孝天皇が、自分のために発願された西山御願寺でした。実現する前に光孝天皇が崩御し、宇多天皇が父親の意思を受け継ぎ建立されたのが仁和寺です。

このように個人がある目的を持って寺の建立を発願するお寺が、歴史の展開に重要な役割を果たすようになってきます。国家が造るお寺、国家の為のお寺というのは限られています。お坊さんは自分の主を決めなければならない、どの道で自分を極めるのかが意識されるようになってくると、宗派の独立性、排他性のようなものが目に見えてくるようになりました。



(仁和寺ホームページから)

○「年分度者」というシステム

桓武天皇が亡くなられた806年に、天台宗を開いた最澄の奏請によって、宗派ごとに年分度者という国家から許可されたお坊さんの再生産システムが確立しました。古代のお坊さんとは、今で言う国家公務員です。規則があり、お坊さんになると国家から公験という身分証明証をもらい、本来なら戸籍に登録されている一般公民ですが、出家すると、戸籍から外され、お坊さんの名簿に転記されます。

これが大きな意味を持ちます。お坊さんは生産活動をしていない人間なので税は取れません。「租庸調雑徭」という古代の税制が、お坊さんには一切適用されず、完全なる免税措置になります。また、自分の所属しているお寺を通じて、必要な生活費は国家から与えられます。しかし、人数は規制する必要があります。お坊さんになる資格は、今の司法試験のように非常に厳しく、なかなかとれません。しかし、どのお寺が何名とか、どの宗派が何名とかは考えていなかったのです。それを明確にするよう桓武天皇に許可をもらったのが最澄です。桓武天皇はその数か月後に亡くなっていますから、どういう意味かはわかりません。その時に初めて最澄は宗派ごとに年分度者をもらいます。宗派により、必ず毎年2人、新しい候補の採用は推薦入試という仕組みが成り立つようになります。

○宗派について

このように、宗派は、まず最澄の時代、桓武天皇の時代に独立しますが、もともとのお寺の宗派の一番の拠点は定まっていたわけではなく、特に奈良のお寺は、東大寺1つとってみても、華嚴宗も法相宗も三論宗もありました。「何々宗」と言うのは今の我々がイメージする宗ではなく、「自分の専攻」ということなのです。排他性はなく、勉強する人間は4つも5つも宗派を勉強していたのです。しかし、お坊さんにも上昇心がありますから、それ相応の地位に就くか、天皇のお

側に就くかということになります。このような動きが起こると、結局、宗派から寺単位の動きが出てきます。

やがて東大寺が華嚴宗、興福寺が法相宗のように、宗派とお寺が一对一で対応するようになってきます。そのきっかけは、最澄が造った延暦寺が、天台宗だけで兼学はしないことからです。

真言宗は少し違い、空海は自分がもってきたのは密教で、従来の禪教けんぎょうとセットで機能すべきと訴え、奈良にある寺院にも、真言宗が入り込みます。

東大寺に、空海が造った真言院があり、空海自身も東大寺の別当になったといわれます。それに対して最澄は、「奈良の仏教は大乗仏教ではない。大乗仏教は天台法華宗だけだ」と言い、延暦寺は天台宗だけになったわけです。

○宗派から御願寺建立の背景

この頃から最澄の影響もあり、宗派としてのまとまり、さらには寺単位の独立性のようなものが出てきます。お坊さんにとっては、皇族や貴族等の有力者に取り入って、自らその個人的な繋がりを得て自分の所属する寺院内や自分が新たに造ろうとしている寺院に後押しをうける事が大事になってきます。その両者のニーズが合体したのが御願寺です。自分の寺を造りたい、自分の宗派をたてたいとお坊さんが願い、逆に皇族や貴族の側は自分の病気を治したい、父親に対する追善をしたいと願う、この両者の願いが合体して御願寺ができてきます。このような体制が一般化してくると様々な論理が出てきます。

○寺院観の大きな転換

日本の寺院観または国家と仏教の関係において、大きな転換になったのではないかと感じているのが、「貞観5年(863年)6月の禅林寺創建に当たっての真紹の上申」、禅林寺は永観堂、御願寺です。

その「永観堂の真紹の上申」を現代風に改めると、「藤原関雄の東山の家を買得し、寺として一堂を造立し、五仏を安置した。僧が俗人の家を買得する行為は、律令によって規制され、また私に道場を建てる行為も格式によって禁じられている。お坊さんは、許可なく他人の土地を売買することは禁止されていて、桓武天皇の命令により勝手に寺を建てることも禁止した。」とあります。

本来、この藤原関雄の東山の家を買い取ったという行為は違法行為になります。ところが、これらの法規制を犯して寺院建立をあえて行うのは、「桓武天皇の鴻恩こうおんに報い、その所願を果たすため、天皇のために私

はやった。天下に王の地でない場所はなく、皆ことごとく国王と大臣に資するものである。日本国の天皇の土地で、天皇のために寺を建てずにはいられない」とこのようになります。つまり、「聖なる教えに則った行為で、愚かな僧(自分のこと)が私的に造ったものではない」というのですが、「願わくは、定願寺の例に預かり、禅林寺と名付けて、師資相伝して朽ちなきものとしたい。」と。

この論理をもってすれば、一切、そういった規制は克服できます。「律令」という厳格な法によって天皇中心の国家、古代国家が造られたのです。しかし、律令の中には天皇に対する規定などはありません。簡単に言うと、天皇は法を超越した存在ということなのです。

「法なんて必要ない、法は私が作る。」かつて、後醍醐天皇がいったことと同じことなのです。

御願寺というのは、新しい日本の国家と仏教との展開を表す象徴的な存在であったといえるのではないかと思います。単純に、時代を経て律令国家の力が衰え、天皇の権威がなくなってきて、新しい仏教との関係ができてきたと、消極的に評価するのではなく、ある時に従来の論理を克服する論理を出した、それが新しい動向を生んだという見方、解釈、評価も、考えるべきだと私は思います。

